

Ⅲ. 中学部

1. 中学部研究の経緯

1) 中学部における社会科の単元構成について

(1) 中学部における「社会科の学習で育みたい力」について

本校中学部において、昨年までは各教科等を合わせた指導の中で、社会科を取り扱っており、今年度から教科単独で社会科を時間割上に位置付けた。そこで、まず、本校の学校教育目標並びに中学部目標の達成に向け、また、特別支援学校中学部社会科の目標を踏まえて、中学部社会科で育みたい力を検討することから始めた（表1）。

表1 中学部の社会科の学習で育みたい力

- | |
|--|
| ①将来の「自立と社会参加」につながる社会的事象について関心をもち、具体的な活動や体験から自分の生活と結び付けて、生活をより豊かにするためにできることを具体的に考える（力）。 |
| ②選択・判断を通して自らの「願い」や「意思」を表現し、さらに他者と協同・協力しあいながら問題解決することで、社会をよりよくするための発信をする（力）。 |

(2) 将来の「自立と社会参加」につながる社会的事象について

前述の「社会科で育みたい力」における①の中に、将来の「自立と社会参加」につながる社会的事象とある。中学部では、社会的事象とは、「人が関与して生み出した世の中に存在するモノやコトである（村田, 2019）」と捉えて、将来の「自立と社会参加」を踏まえ、具体的に学習に反映しやすい社会的事象とは何か、次の方法を用いて整理した。方法は、①ICF-CY「活動と参加」の第8章、第9章にあるコード、②SDGsの17の目標（下位169ターゲット）、③学習指導要領（知的障害教科「社会」、小学校「社会」、中学校「社会」）の中から、「社会的にみられる課題」「将来につながる現代的な諸課題」「社会科の目標」「地球的課題」「日本の特色」等に関する文言、以上3つのツールを用い、将来の自立と社会参加に向けて、学校教育において、取り扱うことが妥当であると考える社会的事象を挙げた。次に、KJ法により分類し、3つのツールに共通する社会的事象、2つのツールに共通する社会的事象をよりニーズの高いものとして、単元の構想に役立てた（写真1、図1）。結果として、2つ以上のツールに共通した社会的事象を表2に表す。



写真1 話し合いの様子

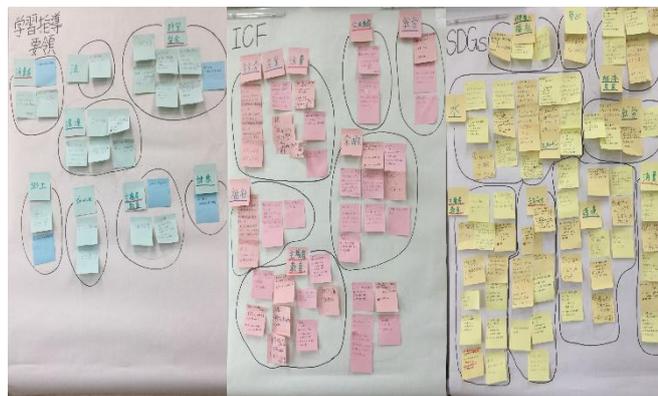


図1 分類した様子

表2 将来の「自立と社会参加」につながる社会的事象

3つのツールに 共通した事項	経済 産業 消費（消費者）主権者教育（市民権、人権、国民主権）
2つのツールに 共通した事項	福祉 健康 就労 環境（水、エネルギー、海洋生物、森林等） 防災・安全（まちづくり）

（3）3年間の単元構成について

前述の手順を経て明らかとなった表2にある社会的事象を基に、中学部3年間の社会科の単元構成を作成した（表3）。網掛け部分が、本年度10月期と2月期の代表授業で取り扱った単元である。

表3 3年間の社会の単元構成

	一学期	二学期	三学期
一年次	私たちの通学路①	文京区の安全・防災①	文京区の安全・防災②
二年次	私たちの通学路②	環境について考えよう①（社会編）	公共施設（福祉とサービス）
三年次	私たちの通学路③	身近な産業	文京区の産業

2）中学部における社会科の授業づくりについて

（1）社会科における学習集団の編成について

中学部では、これまでの学部研究を通して、学習形態として3学年縦割りの習熟度別のグループ設定に配慮することで、生徒にとって学習内容を捉えやすい授業、教員にとって学習評価のしやすい授業づくりにつながることを明らかにしてきた。そこで、これまでの学部研究の成果を活かして、同様の視点でグループ設定を行い、授業を進めることとした。1・2学期（10月期）の単元では、他教科の学習グループでもある二つの班（生徒の実態を統制した班〈A・B〉）を設定し、実際の調べ学習においては、習熟度別の班に分かれて学習をする時間を設けて、授業を展開した。この実践を振り返り、2月期は、単元を通して、習熟度別の班（第1～3班）に分かれて学習をすることとし、実践を進めている。

（2）対象のグループについて

10月期は、第2班を対象のグループに研究授業を行った。第2班には、5名の生徒が所属し、国語や数学において、小学部3段階から中学部1段階の目標、学習内容に取り組むグループを基本に編成している。自分事として捉えられるように、身近な題材を扱ったり、体験を伴った学習を展開したりすることで、社会科の学習が可能である。また、学習展開がルーティン化することで学習内容の定着につながる傾向があると、生徒の実態を捉えた。

2月期における対象授業は第3班である。第3班には、5名の生徒が所属し、国語や数学において、中学部1段階から中学部2段階の目標、学習内容に取り組むグループを基本として編成している。5名中、4名は地域の小学校の特別支援学級や普通学級を卒業し本校中学部に入学している。そのような背景から第3班の生徒の多くが、小学校在籍時から、小学校在籍時に教科としての社会科の学習経験がある。そこで、資料を基に調べ学習を行って、ワークシートにまとめ、グループに分かれて話し合いを行うという学習展開を定着させることで、社会科の授業の理解が進むと生徒の実態から判断して単元を計画した。

2. 指導の実際

1) 10月期の対象授業(第2班)

(1) 単元計画(全班共通)

令和4年度 単元計画

学部・年/組	教科等	時数(想定)	実施時期	作成者
中学部全(A・B班)	社会	23	9月上旬～11月下旬	菅野 佳江

1. 単元名

「文京区の安全・防災①—風水害から身を守ろう—」

2. 単元の構想

(1) 学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	生徒は、日頃からミニ避難訓練を始め、地震や火災を想定した避難訓練に参加し、地震や火事が起きたら逃げなくてはいけないことや怖さについては、体験を通して理解をしている。しかしながら、自然災害についての知識は、生徒によって差があり、正確に理解できている生徒は少ない。また、避難訓練についても、その意義の理解について学習する機会も不足している。
(2) 学習活動・教材 (単元・題材観)	本単元は、自然災害の中でも、実際に現在いろいろところで発生しているゲリラ豪雨や大雨特別警報の発令等ニュースでも見聞きする機会が多い風水害を取り扱う。教材については、単に過去の風水害の映像を視聴するだけでなく、池袋防災館への校外学習を実施して模擬体験から、風水害を始めとする自然災害への理解を深める。そして、自然災害がただ怖いものだとは認識するのではなく、「事前の備え」が必要であることを生徒一人一人が感じ、ハザードマップや防災グッズ等に関するパンフレットの作成を通して、自分事として「事前の備え」について思考を深めていく。また、同時期に、理科において「雨水の行方と地面の様子」の単元を実施し、体験学習を通して、水害がなぜ起きるのか理解を深めることができるように、教科間の学習内容のつながりをもたせる。
(3) 単元の意義・展望 (指導観)	本単元を通して、水害についての基本的な知識をさまざまな視点から深めるとともに、具体的な「事前の備え」について思考を深められる。また、この学びを通して、日頃実施している避難訓練の受け止め方や参加の仕方により変化が見られることも期待できる。

3. 単元目標(単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
風水害から身を守る知識や方法について理解を深め、「事前の備え」について様々な視点から思考し、分かったことを伝え合う。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<ul style="list-style-type: none"> ① [ウ(ア) ⑦2段階] ② [イ(ア) ⑦2段階] ③ [オ(ア) ⑦1段階] 	<ul style="list-style-type: none"> ④ [ウ(ア) ④2段階] ⑤ [イ(ア) ④2段階] ⑥ [オ(ア) ④2段階] 	<ul style="list-style-type: none"> ⑦ 身近な社会に自ら関わろうとする意欲をもち、地域社会の中で生活することの大切さについて自覚を養う。 [1段階]

4. 指導計画

次	小単元名	時数	学習活動
一	自然災害について知ろう	8	・過去の自然災害の映像等で、自然災害の種類【地震、津波、風水害、火山災害】と被害の特徴を理解する。 ・「池袋防災館」で、VR体験、煙・火災体験、地震体験をする。自然災害への思い等を伝え合う。
二	風水害への「事前の備え」について調べよう。	6	・防災グッズや防災に関連すること、避難所について(役割や設置者について)等、「社会的事象の見方・考え方」を働かせて調べ学習を行い、気付いたこと、分かったこと、考えたことなどをまとめる。
三	「私たちの通学路」のハザードマップ(風水害)を作ろう	7	・1学期に学習した「私たちの通学路」に絞って、ハザードマップを作成する。(危険性、避難所の記入) ・学校のすぐ近くにも、風水害の危険性が高い場所があることを理解する。
四	分かったこと、考えたことについて発表しよう。	2	・それぞれの班において、調べたことを発表し合う。(録画での発表) ・発表を聞いて感じたこと、もっと知りたいこと等について、感想を述べあう。 *発信する場: 大塚祭とする。発信方法は、ホームページや冊子の配布等、さまざまな方法を想定。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
<ul style="list-style-type: none"> ① 地域の関係機関や人々は、過去に発生した地域の自然災害や事故に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な備えをしていることを理解する。[ウ(ア) ⑦2段階] ② 自分の生活の中での公共施設や公共物の役とその必要性を理解すること。[イ(ア) ⑦2段階] ③ 身近な地域や自分たちの市の様子が分かること。 [オ(ア) ⑦1段階] 	<ul style="list-style-type: none"> ④ 過去に発生した地域の自然災害や事故、関係機関の協力などに着目して、危険から人々を守る活動と働きを考え、表現すること。[ウ(ア) ④2段階] ⑤ 公共施設や公共物の役割について調べ、生活の中での利用を考え、表現すること。[イ(ア) ④2段階] ⑥ 都道府県内における市の位置や市の地形、土地利用などに着目して、身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること。[オ(ア) ④2段階] 	<ul style="list-style-type: none"> ⑦ 身近な社会に自ら関わろうとする意欲をもち、地域社会の中で生活することの大切さについて自覚を養おうとしている。 [1段階]

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数: A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定: A 概ね妥当 B 要検討()
題材: A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定: A 概ね妥当 B 要検討()

(2) 単元の計画と評価計画 (全班)

①単元の計画と評価計画<第1班>

* 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準
一	自然災害について 知ろう (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の種類(地震、津波、風水害、火山災害)と被害の特徴を示す過去の自然災害の映像を視聴する。 ・「東京消防庁池袋防災館」で、各災害を模擬体験し、各災害の初期対応や事前の備えの方法を考える。 	<p>①自然災害に関わる言葉の意味や特徴を知る。〔小生活イ(イ)2段階〕</p> <p>④各災害の模擬体験で確認した初期対応のポイントや避難の方法について知り、行動しようとする。〔小生活イ(ア)2段階〕</p>
二	風水害の「事前の備え」について調べよう (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・風水害(台風、大雨、暴風、浸水等)の特徴を示す映像を視聴したり、避難する方法について考えたりする。 ・簡易的なジオラマに、風水害の様子を観察し、どこに避難するべきか考える。 ・停電の特徴を示す映像を視聴した後に、ライトを使って暗闇の中を移動する。 	<p>①風水害に関わる言葉の意味や特徴を知る。〔小生活イ(イ)3段階〕</p> <p>⑤より安全な場所にフィギュアを置こうとする。〔小生活コ(ア)3段階〕</p>  <p>写真2 高い場所にフィギュアを置く様子</p> <p>④教員の指示に従って危険な場所を回避しながら行動しようとする。〔小生活イ(ア)2段階〕</p>
三	「私たちの通学路」のハザードマップを作ろう(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・通学路の地形を模したジオラマを作成する。 ・ジオラマに水を流し、安全な場所や危険な場所に気づき、どこに避難するべきか考える。 	<p>③通学路の地形を知る。〔小生活コ(イ)3段階〕</p> <p>②通学路には、高い場所と低い場所があるということに気づき、より安全な場所にフィギュアを置こうとする。〔小生活コ(ア)3段階〕</p>  <p>写真3 高い場所を確認している様子</p>
四	分かったことや考えたことを発表しよう(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・第2、3班と一緒に、これまでに調べたことを発表しあう。 	<p>⑥風水害について学習してきたことや立体形のジオラマを使って、教員や友達に伝えようとしている。〔小生活(3段階)〕</p>

②単元の計画と評価計画<第2班>

* 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準
一	自然災害について 知ろう (8)	<ul style="list-style-type: none"> 自然災害の種類(地震、津波、風水害、火山災害)と被害の特徴を示す過去の自然災害の映像を視聴する。 「東京消防庁池袋防災館」で、各災害を模擬体験し、各災害の初期対応や事前の備えの方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ①災害が起こる前と、起こった後を写真で見比べて、その違いに着目することで、災害の特徴や被害の特徴を具体的に述べている。 ④各災害の模擬体験で確認した初期対応のポイントや事前の備えの必要性を感じ、言葉で表現する。
二	風水害の「事前の備え」について調べよう(6)	<ul style="list-style-type: none"> 風水害による被害と防災グッズを関連づけ、停電、断水後の生活に起こりうる困難の解決に必要なことを予想する。 停電、断水による困難を解決するために必要な防災グッズは何か、選択する。 (明るくする、暖をとる、清潔にする、水をもらう等) 	<ul style="list-style-type: none"> ④停電、断水後に起こりうる困難に応じて、「どのような行動が必要か」について、因果関係を捉えて考え、言葉やカードを選択して表現している。 ④考えた行動に結びつく防災グッズは何か、複数の物を比較検討して選択し、選んだ理由を述べている。  <p>写真4 防災グッズを選択している様子</p>
三	「私たちの通学路」のハザードマップを作ろう(7)	<ul style="list-style-type: none"> 近隣の川を探して、学校のすぐ近くにも、風水害の危険性が高い場所があることに気づき、学校周辺の地理的特徴を調べる。 危険性や避難所(学校の役割)に気づき、一学期に学習した「私たちの通学路」に絞って、水害ハザードマップを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ③地図が学校周辺の地図だと気付いたり、実際に歩いて見つけた川と地図上の川を一致させたりする。  <p>写真5 川を探している様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ②避難所のマークが付いている場所の共通点に気づき、学校や公民館等の避難所としての役割について理解している。 ⑤写真が示す場所と地図上の場所を当てはめながら、川の有無に気づき、危険性の高い場所を地図上に表している。
四	分かったことや考えたことを発表しよう(2)	<ul style="list-style-type: none"> 第1、3班と一緒に、これまでに調べたことを発表しあう。 発表を聞いて感じたこと、もっと知りたいこと等について、感想を述べあう。 	<ul style="list-style-type: none"> ⑥風水害について学習してきたことを、聞いてほしいという気持ちをもって、他のグループの友達や教員に伝えようとしている。

③単元の計画と評価計画<第3班>

* 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準
一	自然災害について理解しよう(8)	<ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の種類(地震、津波、風水害、火山災害)と被害の特徴を示す過去の自然災害の映像を視聴する。 ・「東京消防庁池袋防災館」で、各災害を模擬体験し、各災害の初期対応や災害ごとに、自分がとるべき行動を理解する。 	<p>①過去に発生した地域の自然災害について映像を見て知り、各災害の特徴や被害について理解したことを災害ごとにまとめて述べている。</p> <p>④各災害の模擬体験を通して、各災害の初期対応や災害が起きたときに自分がどの関係機関から情報を得ればよいかを考えまとめて表現している。</p>
二	風水害への「事前の備え」について考えよう(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・風水害によって起こる被害を想像し、日常生活に困難さが生じた場合、備えるべき物を考える。 ・外出先で災害に遭遇した際の、対処行動や関係機関への連絡相談方法を調べて知る。 	<p>④災害後に起こりうる日常生活の困難を想像し、それに対して、どのような物資が必要になるかについて、理由を添えて表現している。</p>  <p>写真6 水タンクの量を調べている様子</p> <p>①公共の施設や機関において、過去に発生した地域の自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことを理解している。</p>
三	学校の周囲の防災マニュアルを作ろう(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺の地形や土地利用について調べる。 ・風水害によって起こった現象からどの関係機関に連絡・相談すべきかを調べてまとめる。 ・学校周辺の危険個所について調べて、避難場所を確認してまとめる。 	<p>②日常生活の中での公共施設や公共物の役割とその必要性を理解して、災害が起こった際にどの機関に連絡をすればよいかを理解している。</p> <p>③身近な地域や自分たちの学校周辺の避難場所をまとめて、理解している。</p> <p>⑤学校周辺の地形や土地利用等に注目して身近な地域の様子を捉え、危険な場所を理解して表現している。</p>
四	分かったことや考えたことを発表しよう(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・第1・2班と一緒に、これまでに調べたこと、作成した物を発表し合う。 ・発表を聞いて考えたこと、もっと調べたいこと等について、感想を述べあう。 	<p>⑥風水害について学習し、作った防災マニュアルをたくさんの人に役立てて欲しいと言う気持ちを持って、他のグループの友達や教員に伝えようとしている。</p>

(3) 他教科等との関連

本単元「文京区の安全・防災①ー風水害から身を守ろうー」を社会科で実践するうえで、理科における単元「雨水の行方と地面の様子」との関連が、生徒の理解を促すためには不可欠であると考え、社会科と理科の各内容を関連づけて学習を進めることにした。理科の実験（砂で作った川に水を流す実験）を通して、大雨で、なぜ川が氾濫するのか（形が変わってしまうのか）その原因を体験的に考えることで、社会科の内容と相互に関連づけて学習することで、より深く各教科の資質・能力の育成を図ることができるのではないかと考えている。

そのことは、年間の単元を進めるうえで、知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本（文部科学省, 2018）に、「(7) 生活に結び付いた具体的な活動を学習活動の中心に据え、実際の状況下で指導をするとともに、(以下省略)」、「(8) 児童生徒の興味や関心、得意な面に着目し、教材・教具、補助用具やジグ等を工夫するとともに、目的が達成しやすいように、段階的な指導を行うなどして、児童生徒の学習活動への意欲が育つように指導する」と示されていることに通ずる、とても重要な視点である。

(4) 実際の指導（第2班）

①本時の目標

- ・ 停電、断水後に起こりうる困難に応じて、「どのような行動が必要か」について考え、キーワードを含んだ言葉で表現する。(4)
- ・ 考えた行動に結びつく防災グッズは何か、複数の物を比較検討して選択したり、選んだ理由を説明したりする。(4)

②指導の展開（一部）

	学習内容	指導上の配慮事項／評価機会
	(導入部省略)	
展開1 (15分)	<p>3 風水害時の停電時を想定した場面で、起こりうる困難について考え、行動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 冬の時期の停電時に起こりうる困難を想像して答える。 ・ 困難を解決するためには、どのような行動をとるべきか、そのキーワードを考えて、答える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> キーワード② 「あたたかくしたい」 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 過去の災害の動画で、風水害が起きると、停電することがあることについて、事実として伝える。「停電」の意味を伝える) ・ <キーワード「あたたかくしたい」> ・ モニターに、「①寒い冬に、風水害が起きる」「②停電になる」のスライドで因果関係を示し、停電すると、「③エアコンが使えない」という困難を、生徒が理解できるようにする。 ・ 「③エアコンが使えない」と、とても寒くなることをスライドで伝える。寒い時にどうしたいかについて一人一人に質問し、キーワードにつながる言葉を引き出したり、つないだりしながら、「④キーワード『あたたかくしたい』」が生徒

<p>展開1 (15分)</p>	<p>フリップ 「あたたかくするために、 〇〇を使います」</p>	<p>の発言で出るように導く。☞④目標①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「④キーワード『あたたかくしたい』』には、体を温めることを目的とする防災グッズを選ぶことが必要だと伝え、本時の目標に立ち返って、より具体的に目標が意識できるように、「あたたかくするために、〇〇を使います」とフリップで示す。 ・ST・MT は、二つのグループで、一人一人が、試行しながら考えられるように選んだ理由を尋ねたり、友達の意見を紹介したりしながら、生徒が自分の意見をまとめられるようにする。☞④目標② ・防災グッズを衝立で隠し、最終的な答えは、自分の考えで選べるようにする。☞④目標②
<p>(以降、省略)</p>		

○授業展開の趣旨

本時の授業は、防災グッズに関する理解を深める目的で実施した。前時までには、数回、断水と停電をテーマに、キーワードを変えながら同じ展開で授業を行い、該当する小単元（二次）の間に、合計6つの状況に合う防災グッズは何かを考える授業を行った。具体的な防災グッズ（実物）を提示し、実際に手に取って、使い方を確認しながら考える時間を設けた。また、自分の考えだけでなく、友達の意見も聞きながら考えがまとめられるように、活動の途中にグループ学習を取り入れた。

(5) 抽出する生徒1名の様子

(目標の達成が難しかった生徒を抽出)

本時の目標	手だて	評価
<p>①教員と一緒に、順序立てて考えることで、困難の解決に必要な行動を選ぶ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員や友達の発言の復唱になってしまわないように、困難の解決に必要な行動のカードを提示し、考える時間を設ける。 	<p>C：手立ての改善 D：目標の変更</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「明るい」と「暖かい」の違いが理解できていないことを本日の授業で確認した。個別の場面で、口頭での説明となってしまった。
<p>②キーワードを理解して、目的に合った防災グッズを一つ選ぶ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・防災グッズを自発的に試すまで、教員は待つ。友達を真似て、試す防災グッズに偏りがある場合は、他のグッズも試すように提案する。 	<p>C：手立ての改善 D：目標の変更</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「暖かくする」というキーワードで、「懐中電灯」を選んだ。友達の言動を頼りに答えている姿が見られた。

評価基準 A：達成 B：指導期間の改善 C：手立ての変更 D：目標の変更

(6) 授業に対する講師講評

本年度の中学部研究において、本研究を進めるにあたり、石田周子先生（附属桐が丘特別支援学校）と、小島道生先生（筑波大学）のお二人に研究講師を担っていただいている。以下に、10月期の授業研究会における講師講評の内容を記載する。

①石田周子先生のご講評 *「社会科」をご専門とするお立場からいただいた。	
・社会科の教科指導	社会的事象の見方・考え方「①位置や空間の広がり②時期や時間の経過③事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」が重要。
・社会科の学習スタイル	社会科は、問題解決をする授業であり、①学習問題を立てる②調べる③結果をまとめる（考察する）の過程を経て、社会に参画していく為に、自分たちにどのようなことができるか考えることに結び付けていきたい。
・社会的見方・考え方を働かせる難しさについて	特に、「①位置や空間の広がり」が重要。【授業実践の例】まずは、学校の中の地図づくりから始めた。基準を決める、近くから遠くへ、前後左右で位置を確かめることに重点を置くといったように、とても丁寧に学習を進める必要がある。簡単に獲得できるものではない。生徒の発言に、位置や方角、距離感等が表れてきて初めて、理解ができてきたと評価ができる。
・目標設定について	授業の後半から、生活科の目標での授業だと感じた。生活科の自分との関わりで、自分をとりまく社会をどう捉えるかという視点での指導が必要ならば、生活科の目標で授業をすべき。社会科とは、自分とのかかわりを離れて、関係機関や地域の人々の役割等の視点で捉えられるようになる段階である。したがって、目標の数や程度は欲張らない方が良い。絞った方が良い。子どもたちが自分で獲得しないと使えるものにはなっていない。活動ありきにしない。活動が先にあって、そこに子どもたちを当てはめるような授業はしない。子ども達が今持っている力で、少し手を伸ばせばできそうなことを授業の目標にするべきである。
②小島道生先生のご講評 *「知的障害」をご専門とするお立場からいただいた。	
・想定すること	「停電・断水」を想定することの難しさがあった。第2班の生徒にとっては、今回の授業で充実していた視覚的手がかり（動画→写真→絵）だけでなく、リアルに想定できるように、疑似体験（電気を消す、エアコンを切る、窓を開ける、水道の蛇口をひねっても水が出ない等）を通して、学習を進めるべきである。注意点としては、生徒一人一人の特性等を考慮し、決してリアルに想定したことが、生徒のトラウマ等にならないようにすることが挙げられる。
・誤った時の支援	間違った時こそ、しっかりと考えて定着できるチャンスである。生徒が選択した理由を伝えられないのであれば、そう答えた理由を代弁すること。単に、前回の答えを覚えていて答えたと考えられれば、そこを一度押さえたうえで、出来る限り、実際に体験して比べる時間を設ける等、体験を通して考えることが必要である。
・「原因」と「結果」をつなげる支援	理科の授業での実験と結び付けていたことは良かった。しかしながら、「水の流れを再現→土砂が流れる→災害が起こる」ことが想像できるだろうか。もっとリアルにミニチュアの電柱や発電所、家等、風水害の被害につながることを想定しやすいうように、教材を工夫する必要がある。
・生徒の行動の背景から	第2班の生徒の実態（MA4歳7か月から6歳8か月）からすると、ちょっと自信のない中学生の学びが見えてくる。人に流されず、一人で考える時間を大切にするのであれば、机の配置やパーテーションの設置等、工夫ができるのではないかと。また、「失敗が怖い」、「正解したい。自分だけが間違っるのは嫌だ。」という気持ちが強い。教員側の改善として、「間違っても良い」ことを強調し、「考えていること」、「自分で決められたこと（自己選択・自己決定）」、「伝えられたこと」にも幅広く、評価の視点を広げることである。

(7) 単元計画と評価計画の評価 (10 月期)

①第 1 班

○単元計画の評価

<時数> 23 時間：要検討

2 時間続きの授業よりも、1 時間ごとに取り組む方が生徒達の集中も続くと思われる。取り扱う内容も多かったため、焦点化する必要がある。

<目標設定> 妥当

小学部生活科の(イ)安全と(コ)社会の仕組みと公共施設の目標を中心に設定した。小单元ごとに、評価規準を設定し、目標を焦点化しながら取り組んだ。生徒達に風水害に関連した擬似的な体験(映像、フィギュアを使った実験(高い・低い)、立体型ハザードマップ)をすることで、教員の問いに対して意欲的に答えようとする姿が多く見られ、目標設定も妥当であったと考える。

<題材> 妥当

風水害に関連した題材であったため、教材が作成しやすかった。生徒達が自ら見たり、触ったりする体験や活動ができたため、適切であったと考える。

<教材・環境設定> 妥当

教材に触ったり、体験できたりする活動を設ける必要がある。

○評価計画(評価方法)の評価

擬似的な体験装置(風水害に関連した教材)を用いて評価した。具体的には、教員の問いに対して、フィギュアを置こうとしたり、指さしをしたりするかを評価場面とした。生徒達の意見や様子などもエピソード記録として評価することが、個々の目標に応じた具体的な評価を行ううえで、有効であった。

②第 2 班

○単元計画の評価

<時数> 23 時間：要検討

計画した学習内容を達成するには、必要な時数であった。しかし、2 時間続きで実施をした際の全班の発表会は、毎回は必要でなかったと感じる。

<目標設定> 要検討

講師の先生方の助言としてあるように、第 2 班の全体の目標を中学部社会科 1・2 段階で実施するには、目標設定に無理があった。体験を重視する生活科の目標が適切であった。また、取り扱う内容のまとまりも多く、目標を絞ることが必要である。

<題材> 妥当

風水害、防災グッズそのものは、適切な題材であった。

＜教材・環境設定＞要検討

教材準備の取り組みやすさから、視覚的手がかりに頼りすぎてしまった。生徒の実態を鑑みると、風水害の被害を想定するには、実際に見て触って感じることでできる教材を用いたり、試行錯誤する為にもじっくりと実物を触る時間を十分に設けたりすることが必要であった。

○評価計画（評価方法）の評価

知識・技能については、一問一答のようにして、風水害の被害の特徴を述べたり、風水害の際に危険となる場所を答えたりすることは、繰り返し行うことで、正答率は上がることが確認できた。思考・判断・表現については、知識・技能のように、一つの答えを求めるような形となり、生徒一人一人が自分で考えたり、選択したりしたことを広い価値観で評価することができなかった。主体的に学習に取り組む態度については、単元内だけでなく、単元後に学習したことを友達同士で伝え合う姿なども含めて、エピソード評価を行うことができた。

③第3班

○単元計画の評価

＜時数＞23時間：一部妥当

「調べる・体験する・まとめる」の学習活動を充実する上で、必要な時数であった。風水害の経験が少ないため、被害の状況や対応、備えについて思考する過程で、「調べる・体験する」時間を多く必要とした。しかし、取り扱う内容が多く、焦点化する必要がある。また、2時間続きの授業よりも、1時間ごとに取り組む方が生徒達の集中もより続くと思われる。

＜目標設定＞妥当

中学部社会科1・2段階のイの公共施設と制度、ウの地域の安全について目標を設定した。小単元ごとに、評価規準を設定し、目標を焦点化しながら取り組んだ。「池袋防災館」で疑似体験を行ったり、備えとして、何がどれくらい必要か考えたりして、風水害から身を守るためにできることを主体的に考える姿を見ることができた。指導者の意図や思考が目標に大きく反映されないよう意識して目標設定をする必要がある。

＜題材＞一部要検討

風水害は生徒の身近で起こる自然災害の一つであり、自分達が住む土地の危険性や起こりうる被害について学ぶ機会となった。風水害を体感する機会が少ないため、生徒たちが想像できる環境設定を行うことに着眼した。教室を暗幕で暗くして、懐中電灯を照らしてどれくらいの明るさかを確認し、袋などを被せたらより明るくなることを知り、具体的に調べたり、体験したりしたことから生活する上での困難さを考え、備えに工夫を重ねてより快適に避難生活を送ることを考えることができた。中学部1・2段階の目標を設定するうえでは、関係機関等の働きについて取り上げる必要がある。

＜教材・環境設定＞妥当

生徒の多くが生活に困る程の風水害の経験をしたことは少ないことから、生徒が想像しやすい教材や環境を準備した。生徒の生活環境に応じ、実際の中で生かせる学びを深める中で、検索キーワードを提示し、思考の整理や焦点化ができる発問や活動を設定することが重要であった。

○評価計画（評価方法）の評価

災害に対する家での防災グッズについて、何が一番必要かを考えたり、足りなくなったものがある材料から作成したりする等の具体的な学習課題において行動観察を行った。防災グッズについての基本的な知識を基に、思考して表現する姿が授業の毎時間見られた。このような学習活動を通して、分かったことや大切に感じたことなどを言葉や行動で表現することを最終的な評価の視点とした。併せて、学習過程における気付きや発想、活動の様子、学習を積み重ねた結果による思考や行動の変化も評価の視点とした。

④全班を通した評価

○単元計画の評価

＜時数＞要検討

各班の振り返りより、特に発表の時間を設けることが時数を増やしていた原因と考えられ、よりコンパクトに計画をする必要あると考える。また、社会科の本単元について考えるだけでなく、同時期に行う他の指導形態の時間を社会科に割いたことは、今後も無理なく継続することが可能な教育課程を検討することにはつながらない。多くとも、一単元 15 時間程度（一単位／週）で、計画をする必要がある。

＜目標設定＞要検討（一部）＜題材＞要検討（一部）＜教材・環境設定＞要検討（一部）

目標設定においては、各班に記載されているように、班に所属する生徒の実態に合う目標を立てる必要がある。特に、第2班においては、中学部1・2段階の社会科の内容を扱うのではなく、小学部生活科の内容を扱うべきであった。題材については、特に、第3班において、中学部1・2段階の目標を設定するうえでは、関係機関等の働きについて目標として取り上げる必要があり、それに応じた題材を選択する必要がある。教材・環境設定については、特に、第2班で、視覚的手がかりだけでなく、生徒の実態を鑑みると、実際に見て触って感じることでできる教材を用いたり、試行錯誤する為にもじっくりと実物を触る時間を十分に設けたりすることの必要性が挙げられた。

○評価計画（評価方法）の評価

全班において、行動観察や発言分析を行い、具体的なエピソード評価を蓄積していた。これは、社会科における評価方法として、妥当であると考えられる。今後も、個々の目標に応じて適切な評価を行うには、生徒の実態に合った適切な問いかけ、教材や学習環境の設定等を検討し続けることが必要である。また、学習過程における気付きや発想、活動の様子だけでなく、学習を積み重ねた結果による思考や行動の変化、学んだことを他の学習場面で生かそうとする態度も評価の視点とすることが重要である。

3) 2月期の対象授業(第3班)

(1) 前單元における生徒の様子(前單元との関連)

①10月期の單元「文京区の安全・防災①—風水害から身を守ろう—」について

自然災害の種類(地震、津波、風水害、火山災害)と被害の特徴を示す過去の自然災害の映像を視聴して、主に風水害について学習をした。

「池袋防災館」で、各災害を模擬体験し、各災害の初期対応や災害ごとに、自分がとるべき行動を知り、風災害によって起こる被害を想像し、日常生活に困難さが生じた場合、備えるべき物を考えた。

風災害による被害と防災グッズを関連づけ、停電が起こった場合や断水が起こった場合に必要な物、食料、衛生用品など、生活に起こりうる困難の解決に必要な物資やその量を予想した。懐中電灯がより明るく見えるための工夫をしたり、水を入れるバックなどに実際に水を入れてペットボトル何本分かを量ってみたりした。また、災害後の避難グッズについてどんなものがよいか、家族4人分ではどれくらいの量が必要かを考えて計算して発表した。他には、マスクをキッチンペーパーで作成したり、ラップでひもやフェイスシールドを作成するアイデアを出し合ったりして学習する様子が見られた。さらに、外出先で災害に遭遇した際の対処行動や関係機関への連絡相談方法について、タブレットで、東京都の防災ホームページを検索したり、災害伝言ダイヤルを調べたりした。身近な地域である自分たちの学校周辺の給水所についても調べて確認をした。単元の最後では、第1・2班と一緒に、これまでに調べたことや、自分たちで備えとして考えて作成した物を発表し合ってお互いの学習内容を確認した。

②10月期と2月期の單元「文京区の安全・防災②—地震から身を守ろう—」の関連

10月期に学習をした風水害で学習したことを生かして、地震による災害後に必要になるものは何かを生徒が学校に持ってきている自助バックの中身を確認することから学習を始めることとする。まずは、10月期に学習した資料を基に、備えは何がどれくらいあればいいのか、一泊二日を過ごすことを想定して考える学習を展開する。次に、学校内の災害設備の確認を行う。グループに分かれて、災害設備だと思うものをタブレットで写真を撮って、それは何のために設置されているのかを話し合いながら、学校に備えられている災害設備の内容やその意味について、理解を深めたい。その学習では、10月期に「池袋防災館」で各災害を模擬体験で学習したことを繋げていきたい。

「池袋防災館」では、防災設備をVRなどで確認をしており、学校内でそれらを発見して、名称と役割を発言する姿も見られている。

最後に、10月期の振り返りから、関係機関等の働きに関する学習を取り入れる。行政の取り組み(公助)、地域住民同士の取り組み(共助)を具体的な例を資料から探してワークシートに書き、グループ内でまとめて発言をする学習を行う。10月期から行っている、資料から読み取ったり、グループ内で意見を出してまとめて発表したりする学習方法をパターン化することによって、生徒たちが授業の流れに見通しをもてるようにしたい。

また、2月期は、小学校4年生の教科書の内容を参考に授業づくりを行うことで、具体的なイメージを持って取り組み、学習内容の理解が深められるかを検討したい。

(2) 単元計画 (全班共通)

令和4年度 単元計画

学部・年/組	教科等	時数 (想定)	実施時期	作成者
中学部全 (1・2・3班)	社会	11~12	1月~2月	久野 智宏・藤本 美佳

1. 単元名

「文京区の安全・防災②—地震から身を守ろう—」

2. 単元の構想

(1)	学習者の興味・関心 (児童・生徒観)	生徒は、地震や火災を想定した避難訓練に参加し、地震や火事が起きたら逃げなくてはいけないことや災害の怖さについては、体験を通して理解をしている。災害が起きた時のために、必要な防災グッズを自分で考えて、事前に備えておくことの大切さも学習している。一方で、災害が起こった際に、人と人がどのように協力し、支え合っているのかを学習する機会は不足している。
(2)	学習活動・教材 (単元・題材観)	本単元は、自然災害の中でも、地震を取り扱う。2学期に池袋防災館で防災への備えについて体験的な学習をしたり、月に1度避難訓練を行ったりしている。本単元では、資料を読んで調べたり、まとめたりする学習を中心に行う。教材については、東京都の街並みの写真や簡単な言葉で要約された文京区防災計画などを用いる。こうした資料を読み取ることを通して、東京都の地理的特徴を掴み、地震が起きたらどのような被害が生じるのか、地震が起きた後にはどのような取り組みが必要なのかを思考することができる。と考える。
(3)	単元の意義・展望 (指導観)	本単元を通して、地震についての基本的な知識を具体的な体験を通して学んだり、さまざまな視点から深めることで災害後の取り組みについて思考を深められたりする。また、写真や簡単な言葉でまとめられた資料をキーワードを基に調べて読み取り、必要な情報を入手する力を養うことが期待される。

3. 単元目標 (単元全体に関わる内容)

単元を通して目指す子どもの姿		
地震からくらしを守る知識や方法、事前の備えについて理解を深め、公共施設や公共物の役割について思考し、分かったことを伝え合う。		
知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
第3班〔中社1段階〕①ウ(ア)㉔ 第2班〔小生3段階〕②イ(イ) 第1班〔小生2段階〕③イ(イ)	第3班〔中社1段階〕④ウ(ア)④ 第2班〔小生3段階〕⑤イ(ア) 第1班〔小生2段階〕⑥イ(ア)	第3班⑦〔中社1段階〕 第2班⑧〔小生3段階〕 第1班⑨〔小生2段階〕

4. 指導計画 (3班のものを掲載)

次	小単元名	時数	学習活動
一	地震とわたしたちのくらしについて知ろう	3	・東京都の地形や土地利用の仕方を見たり地図や写真を見て気が付いたことを伝えあう。 ・阪神淡路大震災、東日本大震災の写真を見て、気が付いたことを伝えあう。 ・被災経験のある方にインタビューをする。
二	家庭や学校や地域で備えているものについて知ろう	3	・家庭にある防災グッズを調べて、発表する。 ・学校や学校周辺の地域の地震への備えについて調べる。
三	行政の取り組みと住民同士の協力について知ろう	4	・公助について、災害時の消防署の動きについて調べる。 ・共助について、災害時に地域住民がどのように協力していたのか、過去の災害の資料をもとに調べる。
四	地震からくらしを守る取り組みをまとめよう	2	・一次から三次までの授業で学んだ防災に関することの中から、自分が大切だと思ったことを選ぶ。 ・地震への備え、地震が起きたあとの取り組みの中から、自助、公助、共助の3つの視点で自分が最も大切だと考えたことを発表する。

5. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に向かう態度
第3班〔中社1段階〕 ①地域の安全を守るため、関係機関が地域の人々と協力していることが分かっている。〔ウ(ア)㉔〕 第2班〔小生3段階〕 ②安全や防災に関わる知識や技能を身に付けている。〔イ(イ)〕 第1班〔小生2段階〕 ③安全や防災に関わる基礎的な知識や技能を身に付けている。〔イ(イ)〕	第3班〔中社1段階〕 ④地域における災害や事故に対する施設・設備などの配置、緊急時への備えや対応などに着目して、関係機関や地域の人々の諸活動を捉え、そこに関わる人々の働きを考え、表現している。〔ウ(ア)④〕 第2班〔小生3段階〕 ⑤日常生活の安全や防災に関心をもち、安全な生活をするよう心がけている。〔イ(ア)〕 第1班〔小生2段階〕 ⑥身近な生活の安全に関心をもち、教師の援助を求めながら、安全な生活に取り組もうとしている。〔イ(ア)〕	第3班 ⑦社会に自ら関わろうとする意欲をもち、地域社会の中で生活することの大切さについての自覚を養おうとしている。〔中社1段階〕 第2班 ⑧自分のことに取り組んだり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり、生活を豊かにしようとしたりする態度を養おうとしている。〔小生3段階〕 第1班 ⑨自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけようとしたり、意欲や自信をもって学んだり、生活に生かそうとしたりする態度を養おうとしている。〔小生2段階〕

6. 単元計画の評価(次年度に向けて) A 概ね妥当 B 要検討

時数：A 概ね妥当 B 要検討()	目標設定：A 概ね妥当 B 要検討()
題材：A 概ね妥当 B 要検討()	教材・環境設定：A 概ね妥当 B 要検討()

(3) 単元の評価と評価計画 (全班)

①単元の計画と評価計画<第1班>

* 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準／評価方法
一	地震について知ろう (4)	<ul style="list-style-type: none"> 地震は揺れるという模擬体験をした後に、事前の備えや対応について考える。 「東京消防庁池袋防災館」で、地震体験し、た様子と避難訓練の様子を写真や動画で視聴する。 頭を守るためにどうしたらよいか、教室にあるものを使って考える。 	<p>⑥行動観察 </p> <p>写真7 模擬体験の様子 (揺れる体験)</p> <p>②行動観察、発言分析</p> <p>⑤行動観察 </p> <p>写真8 本で頭を守っている様子</p>
二	学校で避難生活を送るために必要なものを考えよう (5)	<ul style="list-style-type: none"> 大地震が起きた時に、学校から家に帰ることができない状況の時に、「学校で待機する」「寝る」「食事する」など、何が必要な物かを考えたり、選んだりする。 自助バックの中身を確認する。 避難所での生活を擬似体験する(災害時の寝具、災害用トイレ、非常食等)。 	<p>②行動観察、発言分析</p> <p>⑤行動観察</p> <p>②行動観察、発言分析 </p> <p>写真9 災害用トイレを組み立てている様子</p>
三	勉強したことのまとめをしよう (2)	<ul style="list-style-type: none"> 地震から身を守る方法 (頭を守る方法) や避難所で必要な物を選ぶ。 これまでの学習の写真を見て振り返る。 	<p>⑨行動観察、発言分析、ワークシート</p>

②単元の計画と評価計画<第2班> * 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準／評価方法
一	地震について知ろう (4)	<ul style="list-style-type: none"> 地震の模擬体験から、地震の怖さを感じ、頭を守るためにどうしたらよいか、教室にあるものを使って考えてやってみる。 地震の模擬体験から地震は揺れることを理解し、揺れることと被害の図をワークシートに貼る。 地震の被害を示す写真を見て、地震が起こると、家の中や外にどのようなことが起こるか理解する。 	<p>⑤⑧ 行動観察</p>  <p>写真10 地震の模擬体験の様子</p> <p>② ワークシート</p> <p>② ワークシート</p>
二	学校で備えているものを知ろう (5)	<ul style="list-style-type: none"> 学校に置いている「自助バッグ」の中身を知る。 学校の防災倉庫の存在を知り、中身を調査して、使用目的を考えて仲間分けする。 	<p>② ワークシート、行動観察</p>  <p>写真11 自助バッグ調べの様子</p> <p>⑤⑧ 発言分析、行動観察</p>  <p>写真12 防災倉庫調べの様子</p>
三	学校での備えに必要なものを考えよう (1)	<ul style="list-style-type: none"> 学校に泊まることを仮定して、自助バッグや防災倉庫にあったらよいものを考えて発表する。 	<p>⑤⑧ 発言分析</p>

③単元の計画と評価計画<第3班>

* 黒丸の数字は、全体の単元目標と対応している。

次	小単元名 (時数)	学習活動	評価規準／評価方法
一	地震とわたしたちの暮らしについて知ろう(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・東京都の地形や土地利用の仕方を地図や写真を見て気が付いたことを伝え合う。 ・阪神淡路大震災や東日本大震災の写真を見て、気が付いたことを伝え合う。 ・被災経験のある方にインタビューをする。 	<p>①行動観察、発言分析</p>
二	家庭や学校や地域で備えているものについて知ろう(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校に持ってきている自助バッグを調べて発表する。 ・学校や学校周辺の地域の地震への備えについて調べる。 	<p>①行動観察、発言分析、ワークシート</p> <p>①行動観察、発言分析、ワークシート</p>  <p>写真13 自助バッグを調べている様子</p>
三	行政の取り組みと住民同士の協力について知ろう(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・公助について、災害時の消防署の働きについて調べる。 ・共助について、災害時に地域住民がどのように協力していたのか、過去の災害の資料をもとに調べる。 	<p>①行動観察、発言分析、ワークシート</p> <p>④⑦行動観察、発言分析、ワークシート</p>
四	地震から暮らしを守る取り組みをまとめよう(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・一次から三次までの授業で学んだ防災に関することの中から、自分が大切だと思ったことを選ぶ。 ・地震への備え、地震が起きた後の取り組みの中から、自助、公助、共助の3つの視点で自分が最も大切だと考えたことを発表する。 	<p>④行動観察、発言分析、ワークシート</p> <p>⑦行動観察、発言分析、ワークシート</p>

(4) 実際の指導と評価 (第3班)

① 本時の目標

- ・過去の災害時に設置された避難所での生活の写真を見て、人々がどのように協力しているのか、自分はどのように感じたのかをワークシートに表したり、友達や教員に伝えたりする。(思考力、判断力、表現力等)
- ・自分だったら、どのように人々と協力して災害時に生活をしていくか、具体的に考えようとする。(学びに向かう力、人間性等)

※本時では、前時に知識及び技能を主に取り上げて授業を行った。前時で学んだことを活かして、資料を読み取り、気が付いたことをワークシートや言葉で表現し、自分だったら何ができるのかを考えてもらうために、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力、人間性等に特化した目標を設定した。

② 指導の展開

導入では、教員の説明や簡単なクイズを通して、知識を問う質問や本時に出てくる用語の意味を伝えた。

展開①では、個人やグループでの調べ学習を行った。調べ学習では、自助バックの中身を調べる、校内の防災設備探す、写真を中心とした資料の読み取りを行った。次に、調べたことをワークシートにまとめる活動に移った。

展開②では、2つのグループに分かれ、調べて分かったことや気が付いたことを友達と伝え合い、ホワイトボードにグループの意見をまとめる活動を行った。授業のまとめでは、各グループでまとめた意見を共有し、内容の振り返りを行った。

<導入>

- ・教員の説明や簡単なクイズ

<展開①>

- ・調べ学習:資料を読み取り、気が付いたことをワークシートに記入する。

<展開②>

- ・話し合い
⇒グループの友達に自分の考えを伝える。
⇒教員から出された問題に対して意見をまとめる。

<まとめ>

- ・各グループの意見の共有。内容の振り返り。

図2 本単元の授業展開



写真14 導入の様子

写真15 展開①の様子

写真16 展開②の様子

写真17 まとめの様子

○ 授業展開の趣旨

10月期の研究授業の反省を受け、本單元では、生徒が見通しをもって学習に取り組めるように、毎時間同じ流れで授業を進めた。また、目標・内容ともに焦点化することを意識した。授業の進め方として、自分で調べ、気づき、まとめる授業展開とした。本時では、災害時に設置された避難所の人々の様子の写真を用いた。生徒は、人々がどのように協力しているのかを読み取り、自分なら何ができるのかを考え、ワークシートにまとめた。ワークシートにまとめたことを友達と伝え合うことで、自分以外の考え

を聞き、考えを深める機会になると考え、話し合い活動を設定した。

③生徒との関わり

調べたことをワークシートにまとめる時は、生徒の考えや言葉を尊重し、細かな修正はしなかった。記入が終わった生徒に教員が質問し、どのようなことを書いたのか、なぜそのように考えたのかを受容的な態度で聞き取った。

グループでの話し合いの際には、生徒が意見をまとめることに集中できるように、話し合いの進行は教員が行った。小さい学習集団だが、コミュニケーション能力に差があるので、手だてとして教員が生徒の意見を代弁したり、言い換えたりすることもあった。



写真 18 生徒とのやり取り



写真 19 生徒とのやり取り



写真 20 グループでの話し合い

④評価について

評価方法は、教員とのやり取り、ワークシートの記述、友達との意見交換の3つとした。教員とのやり取りとワークシートの記述は、「知識・技能」、「思考・判断・表現」の両方の評価方法とした。友達との意見交換は、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の両方で評価方法として設定した。ワークシートの記述の評価については、資料から読み取れる事実を表したものは「知識・技能」、生徒の気づきを表したものは「思考・判断・表現」として評価の視点を持ち、分析を行った(図3)。

小単元が終わるごとに、宿題として「ふりかえりシート(図4)」を出した。本グループの生徒は、中学部の中でも言葉でのやり取りが活発だが、相手の意図を読んで発言したり、自分の感じたことを素直に表現したりすることを苦手としている生徒もいる。そこで、この「ふりかえりシート」では、授業を通して、生徒に何が残

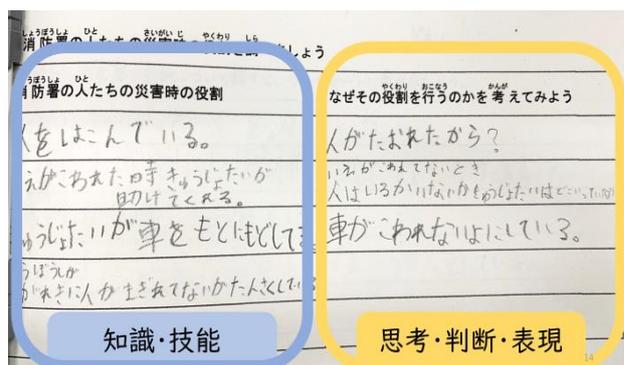


図3 ワークシートの評価の一例

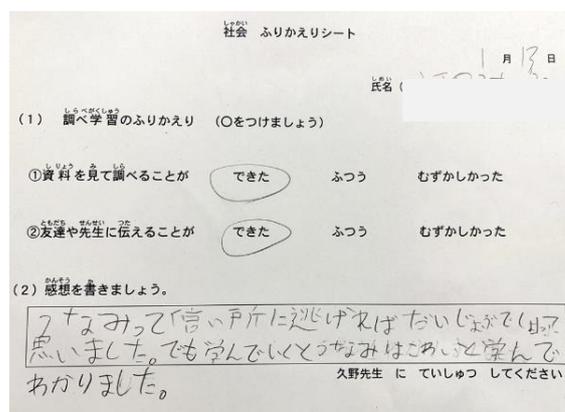


図4 生徒Bのふりかえりシート

ったのか、伝わったのか、分からなかったのかを本人なりの言葉で表現をしてほしいと考え、教員の振り返りとして、評価方法の1つに設定した。

(5) 抽出する生徒2名の様子

①生徒Dについて【評価基準 A:達成 B:指導期間の改善 C:手立ての変更 D:目標の変更】

本時の目標	手だて	評価
①過去の災害時に設置された避難所での生活の写真を使って、人々がどのように協力しているのか読み取り、ワークシートに表したり、友達や教員に伝えたりする。	・人々が協力している様子に気付けるように、共助の例をスライドで提示し、生徒が確認しながら資料を読み取れるようにする。	A:達成 ・資料を読み取れる事実をワークシートに表すことができた。
②自分だったら、どのように人々と協力して災害時に生活をしていくか、具体的な行動を挙げて、表現する。	・自分の考えを具体的な行動で表現できるように、必要に応じて、イラストや写真を提示する。	A:達成 ・食料を配ることならできると答えた。また、教員が「どのようなことに気を付けて配る？」と質問すると「給食みたいに、みんなに(同じ量)配る」と答えた。

<学習の様子>

生徒Dは3年生の男子生徒である。単元開始当初は、ワークシートに記述をする際には、自由記述の欄にスライドの文言を書き込む等、自分で考えたことを表現することが難しかった。しかし、単元が進み、同じ展開で学習をしたことで、資料から読み取れる事実だけでなく、その背景も表現するようになった。

②生徒Aについて【評価基準 A:達成 B:指導期間の改善 C:手立ての変更 D:目標の変更】

本時の目標	手だて	評価
①過去の災害時に設置された避難所での生活の写真を見て、人々がどのように協力しているのか気づき、ワークシートに表す。	・人々が協力している様子に気付けるように、注目して欲しい個所を指差したり、言葉掛けをしたりする。 ・人々の様子が言葉や文字で表現できるように、導入で使ったスライドを提示する。	C:手立ての改善 ・ワークシートに記入した文章から意図を引き出す際の言葉掛けが必要であった。
②自分だったらどのように人々と協力して災害時に生活をしていくか、具体例の中から選ぶ。	・自分の考えを具体的な行動で表現できるように、必要に応じて、イラストや写真を提示する。 ・意見に自信がなく、声が小さい場合、教員が聞き取り、代弁する。	C:手立ての改善 ・ワークシートに記入したものの中から選ぶようにする言葉掛けが必要であった。 D:目標の変更 ・自分なら何ができるかを想像することが難しかった。→人々が協力している場面で1番良いと思うのはどれかを選ぶ。

<学習の様子>

生徒Aは1年生の女子生徒である。資料を見て、気付いたことをワークシートに記入することができた。設備の役割を考えることもできた。共助の資料ではみんなでどのように協力をしているかを読み取ることもできた。しかし、自分だったら何ができるのかを考えることが難しかった。

(6) 授業に対する質問及び講師講評

令和4年度研究発表会中学部分科会では、授業を参観された8名の参加者及びオンライン参加者7名との協議の後、研究講師である石田周子先生（附属桐が丘特別支援学校）と、小島道生先生（筑波大学）に講師講評をいただいた。以下に、分科会での協議内容を記載する。

①協議	
質問1	<p>生徒が資料を見て、先生が示したポイントに沿って、ワークシートに書くという授業展開であったと思うが、授業づくりで参考にしたことや着目点があれば教えてほしい。</p> <p>⇒自身が経験した社会科の授業を思い浮かべると、話を聞く時間が長いと思っている。10月期の授業を振り返ると、そういった話を聞く時間が長かったという反省があった。生徒が活動する時間を長くするのが授業づくりの発想のきっかけだった。導入で、教員の話をも10分以内に終えるよう気を付けた。</p>
質問2	<p>本時の目標では、「人々がどのように協力していたかを考える」であったと思うが、教員と生徒のやり取りの部分で「どんな食料が必要だと思う？」と質問されていた。「どんな物」から「どのように」を生徒からどのような形で引き出す予定だったのでしょか？</p> <p>⇒生徒に対する発問については、授業者間で打ち合わせて事前に聞くことを決めていた。どのような具体物が必要かを尋ねることで、本時の目標である「自分だったら…」という発想に近づけると思い、生徒にはそのような発問をした。</p>
質問3	<p>単元配列表がとても参考になった。社会科を立ち上げるにあたり、他の教科で減らしたものは何か？</p> <p>⇒合わせた指導である生活単元学習を減らした。中学部としては、生活単元学習の時間を残しつつ、社会科も実施している。</p>
質問4	<p>内容については、指導要領でいうと2段階で、目標は1段階かと思うが、いかがか？</p> <p>⇒目標・内容共に、中学部1段階から設定した。</p>
質問5	<p>生活科の目標・内容を扱う第1・2班の実態の生徒の授業で1年間やってみて明らかになったことを教えてほしい。</p> <p>⇒第2班の授業では、10月期は自分の力を活かし、考えて活動に向かうことを疎かにしてしまった。知的障害教育の原則であったと思う。社会科だが、下学年対応をすると無理がなく、子供たちにもより具体的に教えていける。</p>
感想1	<ul style="list-style-type: none"> ・指導要領を比較して、どこがつながっているのかを考えることが大切だと感じた。やはり、知識だけ身に付けるのではなく、「自分ならどういう風にやれるか」を考えること、自分に返ることが大切だと思う。授業でもそのような生徒がいたので、すごいと感じた。 ・資料を読み取ること、時間の流れ、地域の広がり、人々の関わりといった社会の視点で特別支援学校の子供たちも学ぶことが大切だと感じた。
感想2	<ul style="list-style-type: none"> ・もし、自分が授業をするなら自県であった地震を扱う。生徒の経験に基づいて授業を行いたいですが、経験が無い場合、映像等で大きな地震はこういうものだよと伝えることは、大切だと感じた。 ・自身の学校では、防災の日に合わせて、学級カレーやおにぎりを自分で作るなど、防災教育に関連した給食を出している。
②石田先生のご講評 * 「社会科」を専門とするお立場からいただいた。	
・授業について	<ul style="list-style-type: none"> ・10月期は、社会科の授業として何かを教えないといけないと難しく考えている様子だった。それ以降、自分の力で学べるようにするにはどうしたらいいのだろうと考えられたと思った。 ・社会科は、学習問題の設定、調べる時の資料等の扱いが目の前の子供に合っているかが授業、単元が上手くいくかの鍵である。うまく設定できるためには、教科の目標と生徒の様子を理解することが欠かせない。 ・子供たちへの関わり方で、生徒の考えを受け止めている姿が印象的だった。教員が「こうせねばならない」という型があるとそこに子供たちをはめてし

	<p>まおうとするのではないか。型にはまらないと否定をしてしまいがちだと思う。そのようにしていないのがよかった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緊張には2種類あると考えている。1つは自信のなさによる緊張。2つ目は学んできたことを発揮するために頑張りたいという緊張。2つ目の緊張をしている生徒は、周りが段々気にならなくなり、集中してとてもいい表情になる。今日の生徒もそのような様子であった。
<p>③小島先生のご講評 *「知的障害」をご専門とするお立場からいただいた。</p>	
・前提として	<ul style="list-style-type: none"> ・災害について子どもたちは実際に体験していないので、リアリティが必要であった。防災に関わることは、自分の身近なところから範囲を広げていく。 ・ルーティン的な部分があって、生徒がスムーズに参加しており、話し合い活動にも慣れている様子であった。軽度知的障害の生徒には、ルーティンワークを組んであげると生徒たちが主体となって動ける。 ・知識として知るだけでなく、生徒たちに「どうして?」「なんで?」と背景を考える力を育てていくために、どのような発問をすればよいか検討を重ねてきた。
・生徒の実態	<ul style="list-style-type: none"> ・MA10歳の学びは、少しずつ論理的な思考が可能になってくる。 ・自分だけの視点ではなく、相手はどのように思っているかを考えるようになる。 ・メタ認知も少しずつ育ってくる。自分はどこまで分かっているか、分からないかを理解してくる時期である。 ・過去の経験から自信を低下している。失敗した姿を見られたくない。失敗を避ける。このような姿が見えてくるので、意思表示が消極的であったり、頑張ればできることをやらなかったりするため、工夫しながら授業を進める必要がある。
・先行研究	<ul style="list-style-type: none"> ・平成19年度全国学力・学習状況調査の結果から、基礎基本は大切だと言われるが、活用能力にこそ課題がある。意味理解は十分にできていたのか、実際の生活場面で使うことが不足していないか確認し、知識を実際に使う、思考する力を育てることが、通常教育、特別支援教育ともに必要である。
・授業について	<ul style="list-style-type: none"> ・意味理解ができていたかを確認できるとよかった。なぜ、共助なのかを考えることができていたのか?地震が起きた時の避難所での生活をリアルに想定して、子供たちは考えることができていたのか?実際に災害の状況にあったときに、授業で学んだことを思い出して、困った人を助けられるように考えがいくような支援も必要だと思う。 ・最後のまとめで、過去の学習と結び付けるときには、しっかりと伝えて、意味づけを行うことで長期記憶に残るような手だてがあるとよかった。 ・生徒の理解を確認するときには、記入した内容だけでなく、理由を尋ねて、やり取りをしていくことで生徒の理解度について確認をしていた。もしできるのであれば、話し合いの中で、生徒同士で教え合うような場面があると、理解度を見ることができないのではないか。 ・「自分だったら何ができるか」を思考することの手だては、写真であった。子どもたちからは、写真に映っていないところまで意見が出ていた。写真の影響を受けやすい場合もあるので、様々な題材を用意するのもよいだろう。
・メタ認知	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見に対して、友達に意見をもらう機会を設定する。 ・「なぜ?(理由)」「どうやって?(方法)」「どうなる?(結果の予測)」このような問いを他人の発問に対しても使うことで、深く考えることができる。 ・自分を「実況中継」すること。「なぜ」「どうして」と自分に問うこと。他人の意見を聞く。自分の意見に対する意見を踏まえて、見つめ直す。これらのことを通して、メタ認知は育まれる。
・自信がない生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・自信が低下している生徒は、色々な手段を認めてもらうことが大切だと感じた。 ・中学生なので、友達の意見に対して称賛し合えるようになると、自信がもてるようになるのではないかと。

(7) 単元計画と評価計画の評価 (2月期)

①第1班

○単元計画の評価

＜時数＞11時間：妥当

10月期の反省を踏まえ、取り扱う内容については一単位時間の授業の中で、一つの題材に焦点化した動画の視聴や体験的な活動を行う上で、時数として、妥当であった。

＜目標設定＞妥当

小学部生活科の(イ)安全の目標に焦点を絞り設定した。小單元ごとに、重きを置く評価規準を決め、目標を焦点化しながら取り組むことができた。

＜題材＞妥当

地震については、教材として動画は豊富にあったが、生徒が地震を直接体験することができる教材を作成することが難しかった。その他の題材として、避難所体験を取り上げたことで、学校の防災倉庫の中から衣食住に関連する教材を用意することができ、体験的な活動を通して、生徒の考えなどを、ICT機器を活用しながら引き出すことができた。

＜教材・環境設定＞妥当

10月期に引き続き、実際の様子を動画で見ることに加えて、学習内容がどのようなものかについて、体験を通して学習できるような教材や環境を設定することができた。

○評価計画(評価方法)の評価

知識・技能については、10月期と同様に疑似的な体験(地震や避難所に関連した教材)を通し、行動観察や発言分析から評価をした。思考・判断・表現については、ICT機器を活用しながら、生徒の考えを引き出す工夫を行うことで、評価場面を設定した。加えて、10月期と同様にエピソード記録として評価することができた。

②第2班

○単元計画の評価

＜時数＞11時間：妥当

10月期を振り返り、10月期の約半分である11時間と短縮した。取り扱う内容を絞ったことで、11時間でも充実した学習が展開できた。

＜目標設定＞妥当

第2班においても、小学部生活科の(イ)安全の目標に焦点を絞り設定した。小單元ごとに、重きを置く評価規準を決め、目標を焦点化しながら取り組んだ。第1班と同様に、一単位時間に、複数の目標を設けるのではなく、一つないし二つの目標に絞って学習を展開したことは、生徒にとって分かりやすい授業づくりにつながった。

＜題材＞妥当

地震の模擬実験、自助バッグ、防災倉庫ともに、具体物をもとに学習を進めることができた。学校での地震への備えについて具体的に知ったり、自分ならもっとどうしたいかを考えたりすることができ、地震への備えを自分事として捉えられた生徒が多い。

＜教材・環境設定＞妥当

地震の被害については、実際の様子を写真で見るだけでなく、地震の模擬体験を通して、「何が原因で、物が落ちてしまうのか」等を考えることができたことは、10月期と比較し、一番の改善点であった。また、調べ学習は、実物を操作したり、運べないものはその写真を自分たちで撮りに行ったりと、体験を通して学ぶことを重視した。そのため、一週間に一度と、授業の間隔が開いてしまうが、実際に自分が体験をしたことなので、前回の時間に学習する実際の様子を写真や動画で振り返ることで、ほとんどの生徒が学習内容を思い出すことができ、スムーズにその日の授業の学習に取り組むことができた。

○評価計画（評価方法）の評価

思考・判断・表現においては、模擬体験等をもとに考えたり、実際に行動したりする場面での行動観察や発言分析を行った。自分で工夫したり、友達の様子を参考にしたりしながら、自分の考えをまとめ、行動する様子を具体的なエピソード評価として蓄積した。また、知識・技能については、ワークシートを用いて、学習した内容の理解度を確認した。始めは、発言としては正解できていても、ワークシートの記入となると、尋ねられていることが理解できず、不正解となる生徒もいた。しかし、回を重ねるごとに、尋ねられていることが理解できるようになり、過去のプリントを振り返って、適切にワークシートの記入ができるようになった生徒がほとんどであった。

③第3班

○単元計画の評価

＜時数＞12時間：妥当

小学校社会科の教科書「新しい社会4」（東京書籍）を参考に単元を構成した。教科書に記載されている時数は、9時間であった。生徒の実態を考慮し、12時間設定した。膨大な防災の内容を焦点化し、時数も小学校よりゆとりをもって設定したことで、自助・公助・共助について、まんべんなく取り扱うことができた。

＜目標設定＞妥当

中学部社会科1段階のウの地域の安全に絞って、目標を設定した。小單元ごとに、評価規準を設定した。二次の自助を扱った小單元では、10月期の前単元の経験を活かし、3観点全てを目標に挙げていた。しかし、三次目は、学習経験が無い公助・共助を取り扱ったため、3観点全てで目標を立てずに、知識・技能の目標に特化した時間、思考・判断・表現に特化した時間を設定するなど、三次目は目標をさらに焦点化した。

＜題材＞妥当

題材は、表4に表したとおりである。生徒が見通しをもって、学習に取り組めるように授業展開を毎時間同様とした。また、生徒が自ら調べ、気付いたことを表現できるように調べ学習を中心に行った。題材は一単位時間によって変更したが、生徒は資料から読み取れることだけでなく、その背景も考えて表現をしていた。

表4 一から三次目までの題材一覧

次	テーマ	題材
一次	東京の特徴 地震の被害	資料（東京都の街並み）
		資料（過去の地震の被害の様子）
二次	自助	自助バック、校内の防災設備
三次	公助	資料（消防署の働き、被災地での消防士の活動）
	共助	資料（避難所の人々の様子）

＜教材・環境設定＞

本単元では、写真を中心とした資料を教材として多く用いた。資料は、生徒が10分程度で読み取れる量である4枚とした。資料を読み取る前に、調べ学習のポイントを提示したことで、ポイントを絞って資料を読み取ることができていた。

○評価計画（評価方法）の評価

評価方法は、教員とのやり取り、ワークシートの記述、友達との意見交換における行動観察や発言分析であった。ワークシートの記述をもとに、教員が「なんで〇〇しているのだろうか？」「他にどんな物があるといいかな？」と質問したことで、生徒は「健康に過ごすため。」「お菓子があるといい。」など、ワークシートの記述をさらに深めることができていた。友達との意見交換では、自分とは異なる意見を聞いて、「それもいいね」と同意をしたり、同じ意見でも自分とは異なる視点で気付いていたことに対し、自分の理由と比べたりしている様子も見られた。

④全班を通した評価

○単元計画の評価

＜時数＞11～12時間：妥当

10月期の単元を振り返り、他の指導形態の授業時数に影響を及ぼさないことを重視し、週1時間の授業時数で計画し、実践した。どの班も、時数は妥当であったと評価した。

＜目標設定＞妥当

10月期の単元での振り返りや2月期の単元途中での授業検討を経て、全班とも取り扱う内容のまとまりを一つに絞った。そして、第1班は10月期に引き続いて、小学部生活科2・3段階の目標を、第2班は小学部生活科3段階の目標を、第3班は中学部1段階の目標を設定し、実践した。実践を通して、どの班の評価においても、目標を焦点化して学習を展開したことは妥当であったと評価した。

＜題材＞妥当

第1班においては、避難所での生活体験を扱った。第2班においては、自助バッグと防災倉庫を調べて、自分たちの周りにおける地震に対する具体的な備え（自助）を扱った。第3班は、自助バッグや校内の防災設備を調べて、自分たちの周りにおける地震に対する具体的な備え（自助）を取り扱った後、消防署の働きや被災地での消防士の活動（公助）、避難所の人々が協力する様子（共助）について取り扱い、全ての班で、取り

扱った題材が妥当であったと評価した。

＜教材・環境設定＞妥当

第1班においては、避難所での生活体験を通して、様々な防災グッズを実際に使用してみたり、自助バッグや防災倉庫にある避難食を実際に食してみたりと、まずは、体験を通して学習できるような教材や環境を設定することができた。第2班においては、10月期の反省を踏まえ、知識・技能を問う学習から入るのではなく、地震の模擬体験を行ったり、身近な物を使って頭を守る体験、自助バッグや防災倉庫を調べたりする中で、実際に物を操作しながら考える学習を設定することができた。第3班においては、生徒が理解できる資料の枚数を検討したり、資料を読み取るために必要な情報についてポイントを提示することで分かりやすくしたりして、生徒の理解度に応じて、教材等の在り方を工夫することができた。

○評価計画（評価方法）の評価

全ての班において、評価方法としては、個別の指導計画で立案した個人の目標を達成できているかについて、班の実態に応じたさまざまな学習活動を通して、行動観察、発言分析によるエピソード評価を行った。また、班によっては、ワークシートを用いて、知識・技能に関する内容の理解度や、思考・判断・表現について生徒の思考の深まりの度合いを評価した。また、主体的に学習に取り組む態度の評価の観点として、授業以外で見られた生徒の変容についてもエピソード評価を行った。

3 まとめ

1) 中学部における社会科の授業づくりについて

前項において、今年度の実践における振り返りを行った。そこで、中学部では、その振り返りをもとに、次年度以降の社会科の授業づくりにおいて、以下の5点を留意点として共通理解したい。

①時数について

特に、2月期の実践を通して、学習者・指導者双方にとって、無理なく学習を進めることができたと思われる。今年度の授業時間数における評価内容について、次年度以降につなげていきたい。

②目標設定について

取り扱う内容のまとまりを最小限に絞ることで、目標が焦点化された。次年度についても、出来る限り、シンプルな目標設定を行う。例えば、内容のまとまり「地域の安全」を扱う場合に、その地域の地理的な内容や歴史的な内容に触れたからと言って、内容のまとまり「我が国の地理や歴史」の目標を、単元の目標として挙げる必要は必ずしもないと考える。その単元の中で、特に育みたい資質・能力が何かを押さえて指導目標を設定することが重要である。

③題材について

全ての班で、取り扱った題材が妥当であったと評価した。中学部においては、生徒の習熟度別に班編成をしているため、取り扱う題材も、それぞれの理解力に応じて設定

できることは、生徒にとって学習内容を捉えやすい授業づくりにとって、とても重要な点であると言える。

④教材・環境設定について

中学部においては、生徒の習熟度別に班編成をしているため、題材と同じく、生徒の理解度に応じて、教材等の在り方を工夫することができた。第1・2班においては、体験を通して学習できるような教材や環境等を設定することを、今後も生徒の実態に応じて検討していくことが重要である。第3班においては、授業展開のルーティン化、教員の生徒と関わる姿勢、生徒同士の関わり（意見交換）、ワークシートの在り方等、様々な視点で、授業について振り返りを行っている。これらの成果を次年度以降においても引継ぎ、さらに検討を進めていきたい。

⑤評価方法について

個別の指導計画の目標について、行動観察や発言分析によるエピソード評価を行った。今後も、生徒一人一人における学習の成果がどうであったか検討することで、単元計画や評価計画の評価をしていきたい。

2) 3年間の社会科の単元構成について

①他教科との関連について

今年度の中学部においては、3年間の社会科の単元配列表の作成と授業実践を中心にすすめ、他教科との関連については、検討のしやすい部分から実践し、検討し始めたところである。そこで、次年度に向けては、年間計画として、計画的に、教科等横断的な学びが実施できるように検討をすすめていきたい。

②他学部との関連について

次年度以降の本校における研究開発校としての目標は、小学部生活科においては小学校生活科の目標、中学部社会科・高等部社会科においては小学校社会科の目標に準拠し、実践研究を通してその一本化について検討することである。中学部では、高等部までの6年間において、小学校社会科を踏まえた内容の検討するにあたり、知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本を踏まえながら、段階的な学びの連続性のあり方について、教育課程モデルとして実践的な提案を行っていきたい。

【文献】

- 文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）
- 文部科学省（2018）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編
- 文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編
- 村田辰明（2019）実践！社会科授業のユニバーサルデザイン展開と技法, p7, 東洋館出版社
- 厚生統計協会（2010）ICF-CY 国際生活機能分類-小児・青少年に特有の心身機能・構造、活動等を包含-
- 日能研（2020）SDGs（国連 世界の未来を変えるための17の目標）2030年までのゴール 改定新版, みくに出版

（文責：菅野佳江、久野智宏、藤本美佳、菊池恵美、飯島 徹、堀江俊丞、杉田葉子）